逢坂山の歌枕考

On the well knowl poepier spots of Ohsaka Yama

森本茂

一　走井

逢坂山は京都市東山区山科と大津市との境をなす山の総称で、そこの走井と関の清水は歌枕として名高く、文学作品にもしばしば登場する。ところが、一説では両者同じ清水をさすといわれ（たとえば「和歌初学抄」に「ハシリヰアリ、カケヒノ水アリ、セキノシミズトモ」―逢坂の関の項―）、また、こんにちの注釈書類にも、両者とも「逢坂山にあった井」ぐらいの漠然とした説明が施されている場合が多い。そこで以下、両者について若干の考察をしてみたいと思う。

両者の考察に入る前に、まず逢坂の関はどの道に置かれていたかを明らかにしておかなければならない。逢坂の関については、こんにちの逢坂越に設けられたとする説（通説）と、岩田孝三氏「関址と藩界」のように小関越（おぜき）とする説とがある。この点については、かつて私は両者を地形的な面から比較検討し、逢坂越を妥当と考えた（拙著「源氏物語の風土」(2)）。また、奥村恒哉氏も「『平家物語』四、大衆沙汰の事『寺には宮入らせ給ひて後、大関小関掘り切って大衆又検議す』と別々に記しており、また近江への途上、しばしば音羽山と詠みあわされている故に北方説はとれない」として、やはり逢坂越説をとっておられる（「源氏物語事典」上巻、「逢坂関」の項）。これ以上の詳細な考証はここでは省略するが、逢坂の関は逢坂越に設けられたとみるのが妥当と考えられる。

それでは走井はどこにあったのであろうか。走井は本来は普通名詞として用いられた語で、その意味には次の二説がある。

(一) 流れ井（走り流るる水を汲み用いる井）
　　大言海・大日本国語大辞典

(二) 噴泉（水が盛んに湧き出る井）
　　時代別国語大辞典（上代編）

(二)説は「走湯」の用例として、熱海市伊豆山温泉を叙した「逸文伊豆国風土記」に、

走湯は……人皇四十四代養老年中に開基きき。尋常の出湯にあらず、一昼夕に二度、山岸の窟の中に火焔隆りに発りて、湯泉を出し、甚く燐烈る。沸湯を鈍くし、樋を以ちて湯船に盛る。

とあるのにもとづいて、走湯は間歇温泉のことで、一定時間にほとばしり上がるさまにより走湯と名づけたとし、走井も同様に勢いよく湧出する泉の意味であるという。しかし、「大言海」に引用した歌、「ましらの浜の走湯浦さびて今はみゆきの影も映らず」（永久四年百首・雑・出湯）、「走湯の神とはうべぞいひけらしはやきしるしのあればなりけり」（夫木抄・巻二六・温泉・鎌倉右大臣）によれば、「ほとばしり上がる湯」ではなく、「速く流れる湯」の方が妥当であろう。すると「走」は、「激しく速く流れるさま」をいうと考えられる。また、「万葉集」の

この小川霧ぞ結べる激ち行く走井の上に言上げせねども（注1）（巻七）

落ち激つ走井水の清くあればおきては我は行きかてぬかも（注2）（巻七）

の両歌が、走井（走井水）を「激ち行く」「落ち激つ」と形容しているから、走水の「走」は「水の速く流れるさま」をいうとみられる。「盛んに湧き出るさま」を「走る」と形容するのは不自然である。すると、普通名詞としての走井は㈠説が妥当と考えられる。

ところが、奈良時代に普通名詞として用いられた走井は、平安時代に逢坂山が東国・北陸への通路として往来がはげしくなると、固有名詞化し、逢坂山の走井をさすようになったようである。「蜻蛉日記」に、

走井には……近く車寄せて、あてなるかたに幕などかきおろして、皆おりぬ。手足もひたしたれば、心地物思ひはるけるやうにぞおぼゆる。石どもにおしかかりて、水やりたる樋の上に、折敷どもすゑて、物食ひて、手づからすいは（水飯か）などする心地、いと立ちうきまであれど、日暮れぬなどそそのかす。

（中巻・天禄元年・唐崎の祓の帰り）

からうじて行き過ぎて、走井にて破子などものすとて、幕引きまはして、とかくするほどに、いみじくののしる物来。……「若狭の守の車なりけり」といふ。……げすども、車の口につけるもさあらぬも、この幕近く立ち寄りつつぞ、上げさわぐ。ふるまひのなめうおぼゆること、物に似ず。……やり過して、今は立ちて行けば、関うち越えて、打出の浜に死にかへりゐたりければ……。

（中巻・天禄元年・石山詣の往路）

とあり、平安中期までに固有名詞化したと思われる。そしてしだいに歌枕として名高くなり、「枕草子」にも、

井は、ほりかねの井。玉の井。走り井は逢坂なるがをかしきなり。（一六八段）

と書かれている。

次に逢坂山の走井の位置については、ここに引いた「蜻蛉日記」（石山詣の往路）の文によれば、京都・走井・逢坂の関・打出の浜の順である。また、謡曲「竹生島」にも、

四の宮や、河原の宮居末早き、河原の宮居末早き、名も走井の水

の月、曇らぬみ代に逢坂の、関の宮居を伏し拝み、山越え近き志賀の里、鳰の浦にも着きにけり。鳰の浦にも着きにけり。

とあるから、逢坂越頂上の逢坂の関よりも京都寄りにあったのである。走井の付近は、前の「蜻蛉日記」の文によれば、そこで幕引きまわし、一行の者が食事しているから、山がすぐ道に迫った所ではなく、ちょっとした空地があったとみられる。

また、「兼昌集」の

逢坂のかけ樋の水の流るるは音羽の山の木の葉なりけり

という歌の「逢坂のかけ樋の水」は、「走井のかけ樋の水」(清輔集)、「走井のかけ樋の霧」(堀河百首)と同じ意味にみられるから、走井の水源は逢坂越の南側の山、すなわち音羽山(五九三米)であるとみられる。

こんにちの逢坂越の道は、何回も切り通されていて、峠の頂上は当時よりも低くなり、逢坂の関の置かれた場所も明らかでないが、以上の考察によれば、逢坂山の走井は、次の三条件が考えられる。

(1) 逢坂越の頂上よりも京都寄り

(2) 道の南側(音羽山の麓)

(3) ちょっとした空地がある

その当時の逢坂越の道が、こんにちの道より少し高い所を通っていたことを考慮しても、狭い谷間を通る道であるから、こんにちと大きく変わることはなかったであろう。逢坂越の頂上から京都の方へ向かうと、谷間の入口の追分までは、ほとんど山が道に迫った所ばかりである。ただ、月心寺のある所(大津市大谷町)だけはやや空地がひらけ、そこがこんにちは月心寺の境内になっている。

こんにち月心寺の門を入った所に、「走井」と称する井戸があり、今も清涼な水が湧いている。この走井についての記録は、江戸時代の地誌類にあり、それ以前の記録は管見に入らない。次に江戸時代の地誌の記載をみる。

(一) 近江国輿地志略・巻六

下の大谷町にあり。石を畳んで一小の円池とす。其水、はなはだ清涼にして、冷気凛々たり。今は茶店の庭となし、旅人憩息の便りとす。茶店の主、仮山泉水をまふけ、且薬を売る。誠に此水のごとき、清してやはらかなり。古より名を得しも理かな。出づる水の勢、走井の名も宜なり。

(二) 東海道名所図会・巻一

逢坂、大谷町茶店の軒端にあり。後の山水ここに走り下って涌出る事、瀝々として寒暑の増減なく甘味なり。夏日往来の人渇を凌ぐの便とす。

(三) 伊勢参宮名所図会・上巻

今一里塚の餅屋に有。

これらの文によれば、江戸時代には走井のそばに茶店があり、薬も売り、旅人の憩いの井であったらしい。

この走井が平安時代の走井そのものであったとは考えがたい。前に述べたように、普通名詞としての走井は、「はげしく速く流れる水を汲み用いる井」という意味であろうし、また、逢坂山の走井をよんだとみられる歌に、

走井のかけ樋の水の涼しさに越えもやられず逢坂の関（清輔集）

走井のかけ樋の霧はたなびけどのどかに見ゆる望月の駒（注3）

（堀河百首・駒迎）

があり、「蜻蛉日記」の前に引いた文に、「手足もひたしたれば、心地物思ひはるけるやうにぞおぼゆる。石どもにおしかかりて、水やりたる樋の上に、折敷どもすゑて、物食ひて、手づからすいはなどする心地……」とあることなどから推定すると、裏の音羽山から速い清水が流れ下り、それを塞きとめて井とし、その井から流れる細流を筧で通していたのであろう。その位置はだいたい、こんにちの月心寺境内付近であっただろう。こんにち、月心寺のすぐ西側は、京都市東山区山科竹鼻走り谷という。この地名も昔の走井に縁があると思われる。今も月心寺の裏から流れ落ちる一条の細流が認められる。

二　関の清水

逢坂山の関の清水は走井とは別の清水であった。この点について、鴨長明は「無名抄」に、

逢坂の関の清水といふは、走り井と同じ水ぞと、なべて人知りて侍り。しかあらず。清水は別の所にあり。今は水もなければ、そこと知れる人だになし。

と述べている。また、「逢坂の関の清水に影みえて今や引くらむ望月の駒」（拾遺集・巻三・秋・紀貫之）をふまえてよんだと思われる歌、

引く駒は逢坂山の走井に千代の影こそまづ映りけれ（江帥集）

走井の水には影のやどれども立ちこそなづめ望月の駒

（林葉集・巻三・秋）

をみても、別の清水であったと考えられる。

関の清水をよんだ歌は、この紀貫之の駒迎えの歌をはじめとして多くよまれているが、その位置については、古くは「無名抄」に次のようにある。

或る人いはく……（前の引用文に続いて）三井寺に円実坊阿闍梨といふ老僧、ただ一人其所を知れり。かかれど、さる事や知りたると尋ぬる人もなし。「我死なん後は、又知る人もなくてやみぬべき事」と知人に会ひて語りける由伝へ聞きて、彼の阿闍梨知れる人の文を取りて、建暦の初めの年十月廿日の比、三井寺へ行く。阿闍梨対面して、『かやうに古き事を聞かまほしうする人も難く侍るめるを、珍しくなん。いかでか導つかまつらざらん』とて、伴ひ行く。関寺よりは西へ二、三町ばかり行きて、道より北の面に少し立上りたる所に、一丈ばかりなる石の塔あり。その塔の東へ三段ばかり下りて窪なる所は、すなはち昔の関の清水の跡なり。道より三段ばかりや入りたらん。今は小家の後になりて、当時は水もなくて、見所もなけれど、昔の名残面影に浮びて、優になん覚え侍りし。阿闍梨語りていはく、「此清水に向ひて水より北に、薄桧皮葺きたる家、近くまで侍りけり。誰人の住家とは知らねど、いかにもただ人の居所にはあらざりけるなんめり」とぞ語り侍りし。

この中にあらわれる関寺は「拾芥抄」に、「関寺　弥勒在二志賀郡一」

（下・諸寺部）とあり、その創建については「関寺縁起」に、「会坂関東有仏場之旧墟、耆老伝言、昔時此処有関寺、未知何代何人所創」とあるように未詳である。「更級日記」に関寺の丈六の荒造りの仏を見たとあるが、それは再興時の仏であり、おそらく平安初期の創建であろう。廃絶の時も不明である。関寺の位置については、「近江国輿地志略」（巻七）に、

「寺門伝記補録」に、関寺は近松寺の南、逢坂の関の東にあり。関山を背にし、東閭里に接といへり。是を以て考れば、清水町及び上、中、下の関寺町は、往古関寺の堺内なるべし。

とあるのが妥当であろう。関寺はこんにちの長安寺から西の山麓にわたる地、弥勒谷にあったと推定される。

関の清水については「寺門伝記補録」には、「関寺本堂正面大場、中央有一小池、世云関清水者是也」とある。しかし、「蜻蛉日記」「更級日記」に関の清水について一言も触れていないのは、道から少し入った所にあったのかも知れず、また、「古今集」巻十九・雑体の「古歌に加へて奉れる長歌」の反歌に「君が代に逢坂山の岩清水木がくれたりと思ひけるかな」（壬生忠岑）、「逢坂の関の清水の木隠れにおのれ影見る秋の夜の月」（順徳院集）とあるのによれば、清水の上に木の繁った所、山蔭のようでもある。すると、関寺本堂正面の小池とみるよりも、「無名抄」所載の円実阿闍梨の語った所の方が、まだ妥当性があるといえよう。けっきょく関の清水の位置は未詳であるが、こんにちの大津市上関寺町の付近で、逢坂越の峡谷を通り抜けた北側の山麓にあったと推定される。こんにち関清水蟬丸神社の境内に、「関の清水」と称する石組みが残っているが、これは後世の物であろう。

三　逢坂の関

逢坂の関については前述したように、こんにちの逢坂越道が切り通されたものなので、関址の確かな位置は明らかでない。関所は峠の頂上付近にあったと考えられるから、関址は消滅したとみられる。しかし、逢坂の関は歌枕として多くの作品に登場するから、逢坂の関付近の有様・実態を推定するのも無意味とはいえまい。

逢坂山にはさまざまの樹木が繁っていたらしくて、和歌には次のように多くの植物がよまれている。

わぎもこず逢坂山のしの薄ほには出でずも恋ひわたるかな　（古今集・巻二十・東歌）

名にしおはば逢坂山のさねかづら人に知られでくるよしもがな　（後撰集・巻十一・三条右大臣）

あだ人の手向に折れる桜花逢坂までは散らずもあらなん　（同・巻十九・よみ人しらず）

年ふとも我忘れめや逢坂の篠の小薄老いはてぬとも　（古今六帖・巻六・しの薄）

時しもあれなに逢坂の杉が枝に山ほととぎすせきかたむなり　（散木奇歌集）

望月の駒のけづけを逢坂の杉間の蔭にあはせてぞ見る　（同）

逢坂の杉間の月のなかりせばいくきの駒といかで知らまし
（詞花集・巻三・大蔵卿匡房）

我ならぬ逢坂山の葛の葉もかへるとてこそ露もこぼるれ（林葉集）

つつじ咲く逢坂山のさぎむらは木の下闇もあかく見えけり
（重家集）

逢坂の杉の木蔭に宿かりて関路にとまる去年の白雪
（秋篠月清集）

山桜花の関もる逢坂は行くも帰るも別れかねつつ　（拾遺愚草）

さねかづら今は絶ゆとも逢坂のゆふつけ鳥のくりかへし鳴く
（壬二集）

冬と春とゆきあふ坂の松が枝に霞をしのぎ淡雪の降る
（後鳥羽院集）

ところが、逢坂の関付近になると、次のように限られてくる。

関山の峰の杉むら過ぎゆけど近江はなほぞはるけかりける
（後撰集・巻十二・よみ人しらず）

逢坂の関まで月は照らさなん杉のむらだちこぐらかるらん
（公任卿集）

逢坂の関の杉むら引くほどはをぶちに見ゆる望月の駒
（後拾遺集・巻四・良暹法師）

逢坂の関の杉むら葉を繁みたえまに見ゆる望月の駒
（堀河百首・国信）

杉むらのしづえや暗きあひはらの駒引きわたす逢坂の関
（同・師頼）

逢坂の関の杉間に引くなるはこや望月のかげぶちの駒
（同・仲実）

逢坂の関の杉むら木暗きにまぎれやすらん甲斐の黒駒
（同・河内）

逢坂の関の杉原下はれて月のもるにぞまかせざりける
（詞花集・巻九・大蔵卿匡房）

逢坂の関の杉原霞たつ春のしるしはみわもたづねじ　（教長集）

春は今朝越えぬと思ふに逢坂の関の杉むらなほ霞むらん
（林葉集）

逢坂の関の杉むら過ぎながらもとの清水にぬれかへりつつ（同）

逢坂の関の杉もりおひにけりあはれと思ふあはれとを思へ
（五社百首）

逢坂の関の杉むら過ぎがてにあくまでむかふ山の井の水
（式子内親王集）

逢坂や梢の花を吹くからに嵐ぞかすむ関の杉むら
（新古今集・巻二・宮内卿）

枝繁み杉の木蔭に消えやらで雪さへとまる逢坂の関
（拾遺愚草員外）

逢坂や曙しるき花の色におのれよ深き関の杉むら　（壬二集）

打出の浜来るほどに、殿は粟田山越え給ひぬとて、御前の人々、道もさりあへず来こみぬれば、関山にみな下りゐて、ここかしこの杉の下に車どもかきおろし、木隠れにゐかしこまりて過ぐし奉る。
（源氏物語・関屋巻）

逢坂の関の山かげ暗けれど越えて来にけり望月の駒（重之女集）
逢坂の関ならねども夏山は木の下蔭も人はとめけり（顕季集）
昔見しともに今日こそ逢坂の関の木蔭の下涼みして（小侍従集）
逢坂の関のもみぢし心あらば暮れてゆくとも秋をとめなん
（延喜十三年陽成院歌合）
道もせにもみぢ積れば秋をさへとどめて見ゆる逢坂の関
（嘉応二年建春門院北面歌合・実家）
逢坂の関のもみぢの唐錦散らずば袖にかさねましやは
（同・隆房）
神無月もみぢ積れば逢坂の関の岩門訪ふ人もなし
（或所紅葉歌合）
逢坂の関のもみぢ葉散りぬれば秋をとどめんかたのなきかな
（江帥集）

このように逢坂の関所付近は、「杉むら」「杉原」と「もみぢ」に限られている。「杉原」はわずか二例であり、「杉むら」が圧倒的に多い。また、「木蔭」ともあるから、関所付近は群る杉本立が暗い蔭を作っていたのであろう。そして、その中にもみじも所々にまじっていたと考えられる。「逢坂の関の杉むら」は、歌枕のように用いられていたらしい。

さらに、

逢坂の関の岩門踏みならし山立ち出づるきりはらの駒
（拾遺集・巻三・高遠）
雪降りて道たづたづし逢坂の関の岩門見えみ見えずみ（国基集）
雪深み駒は越ゆれど逢坂の関の岩門踏みもならさず（広言集）
引く駒や近くなるらん逢坂の関の岩門音ひびくなり（隆信集）
逢坂の関の岩戸を昨日かも引きて入りけん望月の駒
（粟田口別当入道集）

などの和歌によれば、関所の両側に岩が迫っていたとみられる。

これらを通して推定すると、逢坂の関所付近は、所々もみじのまじった杉の群立ちが暗い蔭を作り、両側に岩がそそり立ち、関所としての威容を誇っていたようである。

（短大国文学科教授）

（注）

1 「激ち行く走井の上」の部分の原文は、「白気結流至八信井上尒」とあり、これを「ながれゆくはしりゐのうへに」「ながらふやまとゐのうへに」などとよむ説もある。

2 この歌は「古今六帖」に、「落ちたぎつ走井の水清ければ渡らで我は行き過ぎむかも」（巻二・井）とある。

3 この歌の第四句は、「散木奇歌集」には「のどかにすぐる」（巻三・秋）とある。